

「日本語人」の群像

- 日本近代作家の視点から -

李 郁蕙

はじめに

ここ数十年、「日本語人」という言葉が市民権を獲得し、よく耳にするようになった。さまざまな使い方を見てみると、一般的に、日本語を母語とする人と、他の言語を母語としながら日本語を読み書きでき且つ常用する人と、二通りの定義があるようだ。前者の場合、人種でも国家単位でもなく主要な使用言語によって世界の人々を広く分類し、たとえば「英語人」「フランス語人」などと対照的に使われていることが明瞭であろう¹。一方後者の場合、むしろ国籍・民族という区分の中で、在日外国人などのように「日本人」ではないが日本語を何らかの理由で日常生活言語の一つとする人々を指す²。どちらにしても、従来の近代国民国家という狭隘な枠組みからはみ出し、言語または文化がグローバルな移動を果たしつつあるという趨勢に伴って新たに造語されたものと見ることができる。とくに、後者が示唆する言語の越境性は戦争や植民地支配といった歴史上、政治上の恣意によって生成されたものが多く、より深刻な意味を持つ。というのは、日本国内における在日朝鮮人・韓国人などの問題はもちろんのこと、海外の日本旧植民地地域で日本語教育を受けた世代が直面した現実も同じぐらいに厳しいものだったからである。たとえば、戦後の台湾では短歌や俳句をたしなみ、歌人大岡信によって「日本語人」と呼称された人たちがいる³。その「日本語人」たちは、「日本語を媒介に得た教養が精神生活を形作」⁴り、いわば言語的なアイデンティティを日本語に持っている。けれども、それが戦後中国語一元化政策の下で悉く否定され、二度にわたり「国語」の転換を否応なしに強いられることになった。また、このことへの反動で台湾の各エスニック・グループ間の葛藤が長い間引きずられ、今もなお選挙が行われるたび議論に浮上するほどの歴史的課題

となっているのだ。そこで、本稿では彼らのような、すなわち非日本民族の「日本語人」に注目し、戦後から 60 年間も経った現在、老齢化のために社会の第一線を退きつつあるものの、一生涯言語的な断絶感と格闘を余儀なくされているその苦渋の姿を、ナショナリスティックな暴力を体現したモデルとして見つめなおすことにしたい。

一方、以上の定義の「日本語人」になるための物理的な条件として何が考えられるのだろうか。これに関して、若林は日本以外の現地では日本戦前の教育制度で中等程度以上の学校を、もしくは日本内地では小学校以上を卒業した者が該当するとの見方を提示している⁵。中等程度以上の学校というのは、戦前の学制によれば、中学校や高等小学校、高等女学校、師範学校、実業学校などを指すこととなる。いずれも 2 年から 5 年の修業年限を要するので、小学校修業年限の 6 年に加えるとおよそ 8 年以上の学校教育を受けていれば、普通の日本人並の日本語読み書き能力を持ち得ると思われる⁶。もっとも、それより低い学歴の場合でも、勤務や交友関係を通じて同様なレベルに達することも決して不可能ではないため、「日本語人」の数を正確に統計するのは難しい。日本の学校教育の導入が最も早かった台湾を再び例にするならば、若林の計算によると現地中等学校卒業生数と日本内地留学生数を両方あわせて 8 万人を超えたという。その一方で、台湾当局の統計数字によると留学生数だけでも 1945 年までに合計で 20 万人に達し、中でも大学や専門学校の卒業生数は 6 万人余だったという⁷。このように、数字的にかかなりの開きはあるが、次のデータを参考にすれば「日本語人」の生成に関わる日本内地留学及び現地中等以上学校進学の状態をある程度推測することができよう。

台湾教育会が編集した『台湾教育沿革誌』によれば、1907 年度の、日本内地留学生数は 63 人であり、前年 1906 年末までの総計は 66 人であった⁸。1908 年以降は、『台湾総督府学事年報』出典の関連数字を見ると逐年増加の傾向が著しく、特に 1926 年度に 1,200 人以上を突破し、記録の残っている最後の 1937 年度には 2,800 人を上回っていたという⁹。この二つの統計を引き合わせれば、最初の台湾留学生が確認された 1897 年から 1937 年までは合計 28,743 人だったので、1945 年までは年度ごとに 3 千人ずつと仮定した上で、人数の重複計算を除いても日本統治期間中およそ 5 万人前後の留学生がい

たことになる。ちなみに、これは1943年人口総数613人の1パーセント未満を占めるぐらいのものであった。一方台湾本島の進学状況に関しては、1919年の台湾教育令につづき、中学校令の発布があった1922年の時点で、台湾人で中等以上教育在籍生徒数は初等教育在籍児童数との割合では約2パーセントにすぎなかったが、終戦前の1944年には約5パーセントに及んだ¹⁰。この数字は、児童総数が一定するという仮定の下で100人の児童に対して中等学校以上の学生が5人ぐらいいたであろうことを意味する。さらに同年現在71.3パーセントという男女児童の平均就学率を計算に入れると、110万人前後の学齢児童総数の中で中等以上教育への進学率がわずか3.5パーセント程度と見ても妥当なところであろう。

以上のことから、「日本語人」とはある意味で日本の近代学校教育によって生み出されたごく一部のエリートの代名詞とでもいうことができる。その端的な例として、高度な日本語能力をもって文学創作に挑む植民地作家たちの存在が挙げられよう。これらの「日本語人」作家たちは作品の中で「日本語人」を直接に描きあげたり、あるいは間接的に「日本語能力」の記号学について触れたりしていた痕跡が見受けられる¹¹。しかしながら、本稿の考察にあたって、あえてそれら「日本語人」自身によるものではなく、戦時中を経験した日本近代文学作家の書いたいくつかのテキストを分析に用いたい。他者で且つ支配側に立つ日本人作家たちの目には、「日本語人」の存在及びその日本語使用問題がどのように映しだされていたのか。この点を明らかにすることで、「日本語人」自らの語りだけでは十分に窺い知れない側面を補い加えることになろう。と同時に、当時帝国の規模に伴って拡大の一途をたどっていった日本語の特権性と普遍性について、日本人作家たちはどのように受け止めていたのか。このことを振り返るのも戦時文学の検証・反省につながっていくからである。

日本語を媒介に

1914年より日本に占領され、1920年に委任統治領となった南洋群島で、中島敦はマリヤンというミクロネシア・カナカ族の女性に出会い、その記憶を「マリヤン」(1942年11月)という文に綴った¹²。彼女もまた、間違いな

く島のエリートの一で、そして「日本語人」であった。

パラオには文字というものが無い。古譚詩は全て H 氏が島々の故老に尋ねて歩いて、アルファベットを用いて筆記するのである。マリヤンは先ず筆記されたパラオ古譚詩のノートを見て、其処に書かれたパラオ語の間違を直す。それから、訳しつつある H 氏の側にいて、H 氏の時々の質問に答えるのである。

「ほう、英語が出来るのか」と私が感心すると、「そりゃ、得意なもんだよ。内地の女学校にいたんだものねえ」と H 氏がマリヤンの方を見て笑いながら言った。マリヤンは一寸でれたように厚い唇を綻ばせたが、別に H 氏の言葉を打消もしない。

中島敦は 1941 年 7 月から翌年の 3 月まで学校視察や教科書編修のためパラオに赴任した。引用の中に出てくる H 氏とは、中島が八ヶ月余りの滞在期間中親交を結んだ民俗学者土方久功のことであり、土方の「パラオ語の先生」を務めたのがマリヤンである。マリヤンは南洋庁の所在地コロール島屈指の名門出身の母を持ち、母系社会の中でその家柄が買われたこともあって戦前コロール島民女子青年団長を務めていた¹³。また、上前淳一郎の「三十年目の南洋群島」¹⁴での追跡によると、戦後まもなく島第一権力者たる女大酋長の座を継ぐべく、王女という地位を囑されていたとのことだった。このような権門とともに、彼女は並ならぬ才気の持ち主であり、イギリス人と島の女性との間に生まれた養父に英語を教わり、土方のノートに記すアルファベットの文を読めたわけである。それだけでなく、上記の引用にもあるように「内地の女学校」に留学した経験もあり、「はいってもいい？」と流暢な一言が初対面の中島に「内地人ではなく、堂々たる体躯の島民女だった」と驚愕を覚えさせたほどである。

『南洋群島教育史』の記述によれば、マリヤンが住んでいたパラオ諸島は 1935 年に、97.72 パーセントと南洋群島の中で最高の就学率を記録し、1915 年に設置されたコロール公学校は 1935 年までの 20 年間、修業年限 4 年の本科の累計は 690 人で、修業年限が 2 年で高等科に類する補習科は累計 654

人の卒業生を出していた¹⁵。けれども、中等教育機関としては、1930年代には島の男子向けの「木工徒弟養成所」と日本人学生のための実業学校、高等女学校が一枚ずつしかなかった。麻原三子雄が公学校補習科修了生なら振り仮名つきの新聞雑誌も読解できると評しているように¹⁶、仮に補習科卒業生が「日本語人」となるのに資する学力があるとすれば、654人に「木工徒弟養成所」の累計卒業生89人全員を足しても、同年現在パラオ人口数6,907人からすると10人に1人との比率だった¹⁷。ところが、日本内地または外国に留学する人は一段と数少なく、1919年より1935年までの17年間、全南洋群島を含めて139人（うち女子は26人）であり、全人口総数51,516人の0.27パーセントにすぎなかった¹⁸。当時、南洋庁当局は植民地間接支配のためのエリート養成という政策は取らなかったが、住民の留学希望に対して家庭事情を調べた上、相当の保護を加えて留学先における宿泊や保証人などの斡旋などの支援を行っていた。有名なものでは1928年から内地留学生に対し学資を支給する社会教育団体「恩賜財団奨学会」もあったが¹⁹、家庭に資力の後援があるかないかが留学を成り立たせるのに何よりも大きい要素であろう。こういう背景から、マリヤンの留学はおそらく前述の由緒ある家柄にも関係して、千人に二人という希少価値のあるものといえる。

けれども、中島が土方に聞いた話では、マリヤンはその「東京の何処か」にある女学校に二、三年通っていたが、卒業はしなかったという。前述した上前の調査によると、マリヤンは1971年に54歳で死去した。そこから逆算すれば、マリヤンは1916か1917年の生まれで、中島と出会った1941年には24か25歳の頃だった。一方、『南洋群島教育史』の作表を参照したところ、日本内地の中等学校へ進学した女子生徒は、1932年に実業学校一人で、1934年に女学校一人ずついた。このことから、1934年のその一人が17,18歳のマリヤンのことである可能性は否めない²⁰。また、同書によれば、当時留学生のうち、小学校在籍者はほぼ卒業したが、中等学校の場合中退者がほとんどだったという。その原因は学力不足の他、都会生活に自制力が乏しく勉学に専念できなかったためと分析されるが、それにしても島に帰ってきた留学生で「有識階級」として相当の地位を占めている者が多いと指摘される。つまり、マリヤンは中卒の学歴を取得していないものの、彼女のエリート性

がやはり留学経験によって約束され、「日本語人」としての素質を十分備えていたのだ。

このことは、中島の描くマリヤンの日常生活から見て取ることができる。まず、マリヤンは中島が「内地人も含めてコロール第一の読書家」と感心したように、本屋さえない町で厨川白村の『英詩選釈』や岩波文庫出版のピエール・ロティの『ロティの結婚』をはじめ、「色々な書物や雑誌」を所持していた。また、その交友関係からしても、「何時も内地人の商人の細君連の縁台などに割込んで話」し、しかもほとんどの場合「雑談の牛耳を執っている」姿が目立っていた。事実、上前に強調するように、彼女は戦後に入っても「歴史、小説、美術とありとあらゆる」日本語関係の書籍を知人に借りて読破していたとのことだ²¹。そのような姿勢は、周りに同様な者が極端に少ない南洋群島では一段と独特な存在に見えるかもしれないが、多くの「日本語人」ならではの生き方に通じるものではないだろうか。

たとえば、谷崎潤一郎は1926年に二度目に訪れた上海では、現地の内山書店主人の取次ぎで郭沫若をはじめ、謝六逸や田漢など中国当代文壇の新世代文人たちと接していた²²。「上海見聞録」と「上海交遊記」²³に記された詳細な経緯を見てみれば、彼らに日本留学経験者が多いためもあるが、日本語の出版物に大きな関心を寄せていたという。

哲学、科学、法律、文学、宗教、美術……今の支那人の新知識は、殆ど大部分が日本語の書籍を通して供給される。無論日本の物と限らない、西洋の物でも日本語で読む²⁴。

内山書店の主人から聞いた話を基に、谷崎は「少なくとも文学においては、日本留学生出身が最も社会から認められ、次第に名を成し、覇を唱えている」ため、「日本の文壇の事情が支那の文壇に知れている程度はわれわれの想像以上である」と述べた。『万葉集』『源氏物語』などの古典をはじめ、武者小路実篤の『ある青年の夢』『妹』や菊池寛の『父帰』『屋上の狂人』など当時の日本の小説や戯曲まで、日本語に通曉する元留学生たちが中心となって続々と翻訳が手がけられていたという。もともと、彼らは厳密に言えば日本統治

下の南洋群島や台湾などと生成の土台においては異なるが、留学を経由した日本という枠組みとの関わり具合から名実ともに「日本語人」と呼ばれてもおかしくない。なぜなら、彼らは谷崎との間は当然のこととして、中国人同士の時にも常に「流暢」でかつ「純然たる東京語」で会話を交わしていたからである。そして何よりも、下記の引用のように谷崎に原稿料を尋ねた点から、彼らが常に日本文壇事情を一つの指標として捉えていたことも推察できる。

或る日、神州日報の余洵君が訪ねて来た。会って見ると、「失礼ながら日本であなたがたがお取りになる原稿料は何字を単位とし、いくらぐらいですか」という。私は四百字を単位とし、最低幾ら幾らから最高幾ら幾らと答えた。(中略)言われるままに書いて送ると、余君はそれ(引用者注——字数を詰めず余白のある原稿用紙)を彼の新聞へ写真版にして出したものだ。そうしてその記事に曰く、「日本の小説家はこれだけでもって幾ら幾らの収入がある。然るに支那では字を一杯に詰めて書いて、千字が単位で、最高僅か七八弗(日本の十円内外)に過ぎない。我が中華民國の文壇はまだまだ後れている云々。」²⁵ (括弧原文)

つまり、日本は彼らにとって自分自身の後進性を意識させ、新知識の供給源となっていた。日本語はその媒介の手段として日本に止まらず、西洋世界への扉を叩くための役割を担う。そのような状況を、谷崎は「往年の日本における英語」のようだといって受け止めた。これに対して、中島は「天井に吊るされた棚に椰子バスケットが沢山並び、室内に張られた紐には簡單着の類が乱雑に掛けられ、「竹の床の下に鶏共の鳴き声が聞こえ」る部屋で英詩やフランス文学の日本語訳を目にし、いささか「へん」で「いたましい」気持ちを抱いた。それぞれの感受性に微妙な温度差があるとはいえ、二氏はともにこうやって日本を離れた外の地で日本語に頼って世界を知ろうと欲する「日本語人」を発見するに至ったのである。

通訳という仕事

ところで、中島と谷崎の見た「日本語人」たちにはもう一つの共通点がある。それは、すなわち翻訳また通訳に携わっていることである。ポストコロニアル理論とその実践を総合的に紹介した『ポストコロニアルの文学』²⁶には、植民地的接触において「通訳者はつねに支配された言説の側からあらわれる」との指摘が見受けられる。この点は欧米の旧植民地国家・地域のみに限らず、戦前日本の進出のあったアジア諸地域の状況についても当てはまることである。日本近代文学のテキストを例に取るなら、1909年に夏目漱石は朝鮮半島や旧満州（現中国東北地方）での見聞に基づいた「満韓ところどころ」を『朝日新聞』に連載させたが、現地在住の日本人に付き添われきりの旅行であった。けれども、時代が明治から大正、昭和になるにつれて、旅の案内や通訳を担う現地出身人物のスケッチが多くなる。前述した谷崎の紀行は既述の通りだが、谷崎の1918年の一回目の中国行の影響を受けて1921年に『大阪毎日新聞』海外視察員として決行したといわれた芥川龍之介の「上海遊記」では、東京留学経験のある若き社会運動家李人傑との交流が通訳の介在を経ずに「流暢を極めてい」る日本語で行われていたという²⁷。また、その前年の1920年に台湾や大陸対岸の福建地方を訪れた佐藤春夫が、「中等程度の学校を卒業」し、役所に勤める台湾人青年を案内役に回っていたことは、「植民地の旅」から確認される²⁸。このほか、中島の南洋群島行と同じ1941年に井伏鱒二は陸軍徴用員としてマレーシアやシンガポール南下しており、そこでの出来事をのどかに描いた「花の町」や「昭南日記」を見れば、現地の中国系住民やマレー人との意思疎通が英語を混ぜながらも直接日本語で図られていたことが分かる²⁹。要するに、以上の植民地・準植民地社会においては日本勢力の拡大に伴って日本語の浸透が次第に広まっていき、いわば一つの支配的な言説あるいは権力的な象徴と化す傾向にあった。そこで、支配側と被支配側双方の伝達役は当然ながら、「日本語人」のような日本主導の学校教育などによって育てられた人々の手に委ねられる形となる。ただし、彼らは母語にも日本語にも通じるのを武器に、当の両側を行き来するだけではなく、自分自身が支配者の内側に近寄る（さらには立ち入る）かすかな可能性をもつなぎ止めているとわいていい。

被支配側出身の通訳者をモデルに真正面から描写するものとして、牛島春子の「祝という男」³⁰が想起される。同作品は1940年9月に『満洲新聞』に発表されて以来、同年度下半期の芥川賞有力候補作となり、何度かにわたって精選集に再録されていたように、満州文学か戦争文学を語る際によく取り上げられる傑作の一つである。主人公の祝廉天は、牛島自身の回想によると、中国東北部の奥地にある拝泉県で知り合った実在の人物だったということが明らかになっている。当時、牛島の夫晴男氏は元「満州国」の役人で拝泉県の参事官（副県長）に命じられて赴任したところ、県公署の通訳に祝がいた。彼は山東省出身の39歳で、「鋭い眼付き」や「頭の回転が早く、ツケツケツケと遠慮がなかった」物の言い方などが周囲に強烈な印象を与える人だったという³¹。

真吉の妻のみちが急用が出来たりして暑い盛りに呼びに行ったりすると、鶏や豚を飼ってある古びた家の中から、白い日本の湯あがりにぐるぐる兵児帯をまきつけ、ほう歯の下駄をつっかけた祝が出て来た。物珍しさに着ているとも見えず、自然に平気で着ながしているのだった。

これは全篇の中で祝の私生活を描く唯一の箇所からの引用である。現実の人間関係図と対照させて推測すれば、新任副県長の風間真吉が牛島の夫で、そして妻のみちが牛島自身ということになる。真吉とみちに充てられた「日系」官舎の後に「満系」³²用宿舎があり、そこに祝は母と妻子と六人で住んでいた。庭の空地で家畜を飼うといういかにも中国ならではの家屋風景と、浴衣を身にまとして下駄を履くという日本風の格好で無造作にいる祝。このように異様な対比を、牛島は一植民地としての「満州という不思議に混んとした国」の表象と重ねて描きたたように思われる。

祝は県公署の「満系」と「日系」職員が混在する職場の中でも一際日本語が「達者」といわれるけれども、テキストの中では彼の日本語学習歴に関して直接に触れられていない。そのかわりに、牛島が後に拝泉の思い出を語る随筆の中で「どこかの日本語学校を出た」と付け加えた箇所が見つかる³³。

そもそも「満州国」の境内では日本語教育の展開が正式的には 1932 年以降と歴史が浅いものではあるが、近隣の「関東州」と呼ばれていた大連、旅順などを中心とした遼東半島の先端や「南満鉄道」沿線では、すでに 1904 年から三十数年の歴史を有し、各種公立教育機関完備の他に私立の日本語学校もあった。それを踏み台として、最も重要な「国語」ということで「就職上の優先的地位の獲得」のためもあって日本語の学習熟が一気に加速した³⁴。この点は、1936 年より実施開始された日本語能力試験受験者数が第 1 回の 3600 人から 1941 年第六回の 3 万人強に激増したことからも見取れる。ちなみに、この試験の及第基準は特等、1 等、2 等、3 等と分かれ、「会話において一般の教養ある日本人と異なることなく、読み書きの力は日本の中高等学校卒業以上」³⁵とされる 1 等以上は、本稿のいう「日本語人」相当のレベルと考えられよう。そんな中で、上記の地域と少し離れた山東半島出身の祝は、具体的にどういう経緯で日本語を知るようになったのかが不明のままだが、日本人と区別のつかない日本語能力や身なりからして、「日本語人」の仲間であろうことが想像に難くない。

一方、通訳者としての祝は、どういう態度で仕事に臨むのだろうか。

なるほど祝のやり方はただの通訳とはちがっていた。彼は相手がすこしあいまいな物腰になると急に目を光らし真吉の質問をひたたくようにして通訳したが、体をのり出し威嚇するような勢이었다。彼は訊問のつぼをよく心得ていて巧みに男からのつびきならぬ返答を誘い出した。男はのちには祝の方に拝むように答弁した。

引用は祝が真吉に同行し証告人の尋問を取り次ぐ場面である。ここでは、祝は一人の通訳者というよりも、むしろ真吉に代わって主導権を握り、いわば権力者側に成りすました一面を見せる。しかし一方では、ある軍馬購買の件に関わるとき、現地村民の気持ち酌んで係の日本人を牽制した上、値段の折衝交渉を有利に進めたという被抑圧側をかばう苦心の跡も見受けられる。

祝は検査の場所につき切りでいて、馬をひいて来た村民を適当

の位置に据えたりして世話をしていた。下士官は身長を計ったあと「看々口」「看々口」を連発して馬に口を開けさせようとするが、馬は嫌がってなかなか開けず、持ち主は恐縮してまごつくばかりなので下士官達は痲癩を起こして嘔鳴りつけたり、邪慳に馬をつついたりした。すると祝はそ知らぬ顔つきでそんなに嘔鳴っても、馬はあばれるばかりで言うことは聞かんな、と聞こえよがしに言うので、下士官はこれで黙ってしまった。こういうような一種の牽制を祝は無遠慮にやってまわり、それだけ村民達の気持ちをらくにしてやった。誰もこのずけずけた無遠慮な満系に一目おき「祝さん」は購買班の相談役になってしまった。

このように「日系を皮肉り、満系の怠惰を憎む」と満ち溢れんばかりの正義感が持ち味で通訳の役割を忠実に全うしようとする祝だが、皮肉にも被支配側という出身のためジレンマに陥るのを避けられないのは必至であった。

遊離する立場

前述の『ポストコロニアルの文学』は、植民地的状況を生きる現地人通訳者の役割の曖昧さについてこう分析する³⁶。

したがってその役割は、根本的に分裂した目的をふくみ込むことになる。すなわちそれは、旧来の言語と文化を維持する目的から、新しい言語および文化を獲得するために機能する一方で、侵入者たちがその古い文化を圧倒することにも手を貸してしまうのである。そしてこのような分裂した瞬間に通訳者が発見するのは、いずれの言説を選ぶにせよ、その一方によって完全に生きることがいかに不可能かという事実である。通訳者が危ういバランスを保つこの二つの言説の交錯点は、刺激的であると同時に、ひどく不穏な場である。ちなみに、通訳者のこのような役割は、破壊と創造との葛藤に巻き込まれた、ポストコロニアル作家自身の役割にも通じるものがある。

つまり、通訳者とは本来ならばどちらの側にも味方せず、また敵対しないで言葉・文化の差異に生じた双方の乖離を中立的に解消することが期待されるが、植民地におけるそれは往々にして支配側の圧倒的な立場に従属してしまい、同胞たちにツケを転嫁・加担してしまうことが多い。反面、出身の差異問題で支配側から疎外されてしまいがちなため、結局どちら側からも敬遠され、部外者扱いにされる危険性が常に伴うのである。もちろん、祝の場合も例外ではない。公署では「満系」であるがために日本人職員に煙たがられたと同時に、本人が「満州国が潰れたら、祝はまず先にやられますな」と悟っており、常時拳銃を身から離さなかったようにアンビバレンスを背負わされたまま生きざるを得なかった。そして、残念なことに、彼の懸念が見事に的中してしまうのである。テキストそのものは真吉夫婦が公署を転任した時点で完結しているが、現実のモデルの祝は 1945 年日本の敗戦とともに「満州国」が崩壊したのを機に現地の住民により惨殺されたそうである。「処刑勝手」と公憤をあらわにされた所以は、いうまでもなく、裏切り者＝「漢奸」という罪名だったからほかにならない。

祝の境遇はあまりにも極端な一例であるかもしれないが、牛島によっていみじくも扱われているその覚束ない立場が、彼一人独特というよりも、多くの「日本語人」の通訳者に共通するものと考えられる。ここで、一旦中島の「マリヤン」に戻ってみよう。マリヤンの場合、祝のようにリアルな緊迫感を隣りあわせではないが、その結婚事情から象徴的に示されているように、彼女も葛藤の渦中にいたといっても過言ではない。

マリヤンには五歳になる女の児がある。夫は、今は無い。H 氏の話によると、マリヤンが追出したのだそうである。それも、彼が度外れた嫉妬家であるとの理由で。斯ういうとマリヤンが如何にも気の荒い女のようなのだが、——事実また、どう考えても気の弱い方ではないが——之には、彼女の家柄から来る・島民としての地位の高さも、考えねばならぬのだ。

まず、彼女には離縁した夫がおり、離縁の原因はコロール島第一名家とい

う家柄に大きく絡んでいることになっているが、何ととっても二人の「頭脳の程度の相違」にもあるとされている。また、日本留学経験を通じて「開化」を遂げた彼女ということもあり、「大抵の島民の男では相手にならない」上、友達も日本人ばかりという状況に立たされ、再婚がめったにできないままになっていた。しかしその一方、日本人との付き合いに対しても、彼女は次のように心細さを感じずにはいられない。

正月以来絶えて口にしなかった肉の味に舌鼓を打ちながら、H氏と私とが「いずれ又秋頃迄には帰ってくるよ」（本当に、二人ともその予定だったのだ）と言うと、マリヤンが笑いながら言うのである。

「おじさんはそりゃ半分以上島民なんだから、又戻って来るでしょうけれど、トンちゃん（困ったことに彼女は私のことを斯う呼ぶのだ。H氏の呼び方を真似たのである。初めは少し腹を立てたが、しまいには閉口して苦笑する外は無かった）はねえ。」

「あてにならないというのかい？」と言えば、「内地の人といくら友達になっても、一ぺん内地に帰ったら二度と戻って来た人は無いんだものねえ」と珍しくしみじみと言った。（括弧・傍点原文）

引用箇所の前には、土方と中島が冗談のつもりで日本人男性との結婚を勧めたところ、マリヤンがそれに対し「内地の男はねえ、やっぱりねえ」と否定的なニュアンスをもらし、悩んでしまうといった内容の記述がある。この流れから、マリヤンは再婚相手としても友人としても日本人に完全には心を開かない、というよりもむしろ開かれていない現実を自ら意識していたことがいえる。つまり、彼女は日本語を通じて日本人と接している中で、日本そのものと自分の間に横たわった厳然たる境界線はどうも越えられず、最終的に島に取り残されていくであろう孤立感にかられていたのだ。このように、マリヤンは文明を受容したインテリとしてパラオの土着的なものに相容れなくなった一方で、日本との縮まない距離を痛感せざるを得ない、すなわち『ポストコロニアルの文学』でいう通訳者の「分裂」の危機にさらされていた一人である。このことは、再婚相手の問題としてのみ浮上するのではなく、マ

リヤンが自ら「カナカ的な」容顔を嫌い、真白な洋服を赤銅色の身体にまとったところからも見受けることができる。

わたしはマリヤンの盛装した姿を見たことがある。真白な洋装にハイ・ヒールを穿き、短い洋傘を手にしたいでちである。彼女の顔色は例によって生々と、或いはテラテラと茶褐色に飽く迄光り輝き、短い袖からは鬼をもひしぎそうな赤銅色の太い腕が逞しく出ており、円柱の如き脚の下で、靴の細く高い踵が折れそうに見えた。貧弱な体躯を有った者の・体格的優越者に対する偏見を力めて排しようとはしながらも、私は何かしら可笑しさがこみ上げて来るのを禁じ得なかった。が、それと同時に、何時か彼女の部屋で「英詩選釈」を発見した時のようないたまじさを再び感じたことも事実である。但し、此の場合も亦、其のいたまじさが、純白のドレスに対してやら、それを着けた当人に対してやら、はっきりしなかったのだが。(傍点原文)

こうして、中島は洋風の装いをしたマリヤンの様子を胴体の特徴から肌色まで細微にわたって描きあげながら、マリヤンの蔵書を発見した時に次ぎ、二度目の「いたまじさ」を覚えたと言った。原因は、一度目の時と同様に、その姿に支配者と被支配者との、文明と土着との交錯点に追い込まれた者の矛盾の露呈を受け止めていたからではないだろうか。

もともと、こうしたマリヤンを取り巻く状況の困難さ及びそれを鋭敏に捕捉できた中島の洞察力に関しては、既に先行研究の中で言及されている³⁷。けれども、ここで強調したいのは、これまで述べてきたように、必ずしも一個の作品に尽きることなく、たとえば「祝という男」のような「外地」滞在経験を共通して持つ他の日本人作家の作品で通訳的立場に置かれる植民地新興知識人の描写というモチーフをめぐるつながりを見せているという点である。「マリヤン」も「祝という男」も完全にノンフィクションかどうかは検討の余地があると思われるが、二作の中からはいわば「日本語人」の群像というものを浮き彫りにすることができる。また、それに加え、谷崎や芥川た

ちがその 20 年ぐらい前に先立って紀行文に書きとめていた人物らを引き合わせてみれば、更なるリアリティーが増すことになる。というのは、郭沫若や田漢などは 1920 年代谷崎の訪問時にはまだ一介の文化人というイメージが強かったのだが、その後中国動乱の大波の中で革命や抗日運動に投じたり、日本への亡命を企てたりもしたなど波瀾の道のりを歩んだという³⁸。この点から、彼らはマリヤンや祝よりずっとインパクトのある形で「日本語人」の存在及び日本と母国の間に揺らぎ続けていた心中の葛藤を日本近代文学の歴史に刻み込んだといえるのではない。

おわりに

以上、戦前日本の支配を受けた南洋群島や「旧満州国」などの地域において日本語の権力象徴化及びそれに伴った「日本語人」の生成を日本近代作家の作品を通じて考察した。最後に、自分自身も「日本語人」にほかならない植民地作家たちの自画像との簡単な比較を行いながら本論を終えたい。

筆者はかつて数人の台湾人作家の作品を分析したことがあり、その中で作家が自分と等身大の「日本語人」と思われる人物を好んで描くことが分かった³⁹。というのは、その人物たちが常に、留学や高等教育を経て医者や教師などの職につき、日本語が堪能な新興インテリとして登場しているからである。彼らは本業が通訳ではないものの、例えば統治当局の役人側などと現地住民とやり取りをする場面に立ち会うと、日本語に通暁するという事で双方の意思疎通の媒介になることが少なくない。その際、従属的な加担者になって統治側に同調するほか、時により被統治者を不憫とし同胞として義憤を禁じざるを得ない、というような多様な側面が語られている。これらは多くの場合、突発的で偶然性が強いので大きなコンテクストの中でつい見過ごされがちなものだが、本論の分析で得た結果から、それが役柄をより引き立てる要素として深く吟味する価値のあるものといえることができる。つまり、同情にしる、軽蔑にしる、無力感にしる、通訳の仕組みを通じて無造作に露出されたそれぞれの感情が二重にも三重にも内面に入り交じっているアンビバレンスにこそ、「日本語人」ならではの真実がある。その真実に外側から呼応し、具現化しているのが、中島敦や牛島春子のような統治側と被統治側の境

界に足を踏み入れ、自らも絶えずアンビバレントな感情を意識せざるを得ない日本人作家の作品なのだ。

そもそも台湾においても朝鮮半島においても多くの「日本語人」は戦後激しく民族主義的な自己批判を強いられることになった。とりわけ作家たちは植民地社会の矛盾を暴き出し、支配的な言説を覆そうとした筆跡が否定され得ないにもかかわらず、なぜ支配言語の日本語で表現しなければならなかったのかというナショナリスティックな追及に直面し、ある意味で道徳の「死」同然の判決を受けることになったのだ。現実的に、困難に耐えて生き延びてこられた者もいれば、紛争に巻き込まれて命を落としてしまった者も数少なくなかった。そこで、日本語及び日本は、いったい、「日本語人」にとってどのような意味合いを帯びるものなのか。この問題に関しては、現在、タブー視されなくなったとはいえ、問われる者も問う者も明晰で且つ還元的な答えを出すことがもはやできなくなっているのだろう。彼らの残した筆跡に立ち返って探る方法が基本であろうが、今回は日本人作家の作品を用いて他者化する方法を試してみた。こうすることにより、「日本語人」にとって、日本語は常に精神形成や知識吸収のための手段であり、日本はおろか、世界と接触するための方法でもあったことが見て取れた。しかし同時に、彼らにアイデンティティをめぐる混乱を生じさせ、時には出口のない袋小地に追い込んで苦しめることになる重大な要因にも違いなかった。本稿に続き、今後も「日本語人」に関わる諸事情を他の側面から更に追究しつづけたい。

註

¹ もっとも「英語人」「フランス語人」といった言葉にも、英語を母語とする人と、欧米の旧植民地地域または移民などが原因で英語を常用する人との使い分けがある。本稿の問題提起はその区別を追究することにもつながるのだが、ここではひとまず「日本語人」の場合に限定して考える。なお英語を母語か母国語とする「英語人」を使う例として、五味太郎監修『英語人と日本語人のための擬態語辞典』（ジャパントイムズ、1989年12月）が挙げられる。

² のちに本文で触れることとなる孤蓬万里編『台湾万葉集』（集英社、1994

年2月)での大岡信の序詞や、Masahiro Wakabayashi “Taiwan's ‘Nihongo-jin’: Poetry in a second language”, *Japan Update*, October 1994, pp.16-17 を参照。

3 前掲『台湾万葉集』5～11頁を参照。ちなみに、歌人たちも作歌の中で「日本語族」と自称している。

4 若林正文『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人 - 台湾人の夢と現実 -』朝日新聞社、1997年7月。

5 前掲, “Taiwan's ‘Nihongo-jin’: Poetry in a second language” を参照。

6 戦前日本の植民地では、現行の小学校に相当するものとして、「国語を常用する者」(主に日本人児童)向けの「小学校」と、「常用しない者」(主に現地出身児童)向けの「公学校」(台湾)や「普通学校」(朝鮮半島)がある。修業年限は四年から六年まで何回かにわたって改められ、最終的に六年と統一された。なお、1941年日本における国民学校制の実施に際して、いずれも「国民学校」と改められたが、本稿では小学校と一括して呼称するか、現地の学制に従って「公学校」などと呼称することがある。

7 国立編譯館編『認識台湾(歴史編)』台湾・国立編譯館、1997年8月、74～75頁。日本語訳本として、蔡易達・永山英樹訳『台湾国民中学歴史教科書台湾を知る』(雄山閣出版、2000年3月)がある。

8 台湾教育会編『台湾教育沿革誌』、1939年12月、73頁。

9 渡部宗助「アジア留学生と日本の大学・高等教育 - 植民地・台湾からの留学生の場合 -」『大学論集』2集、広島大学教育センター、1974年3月、89～104頁。

10 鍾清漢『日本植民地下における台湾教育史』(多賀出版、1993年2月、177頁)によると、1944年、台湾人で小学校と公学校在籍児童数は合計88万人強で、一方、同書の付表(328～357頁)を参照に計算すると、同年現在中等学校以上の台湾人生徒数は4万人弱であった。ちなみに、森田芳夫『韓国における国語・国史教育 - 朝鮮王朝期・日本統治期・解放後 -』(原書房、1987年12月、110～111頁)の統計数字では、1943年の朝鮮半島の状況も大体5パーセントぐらいの割合だった。

11 これに関しては、拙稿『『日本語文学』とは何か - 台湾の場合を考える -』(『立命館言語文化研究』16巻2号、2004年10月、137～146頁)を参照。

12 「マリヤン」は中島敦の作品集『南島譚』(今日の問題社、1942年11月)に収録されている。本文での引用は講談社文芸文庫刊行の『斗南先生・南島譚』(1997年3月)に準拠する。

13 「コロール女子青年団」とは、他の三つの女子青年団とともにコロール校

下女子青年団に一括して組織され、1928（昭和3）年8月に発団された。公学校職員の指導の下で修養講話会、家事実習会、共同耕地開墾事業などを行っていた。詳しくは、南洋群島教育会編『南洋群島教育史』（1938年10月、復刻版『旧植民地教育史資料集1 南洋群島教育史』、青史社、1982年1月）337～346頁を参照。

14 上前淳一郎「三十年目の南洋群島」『文芸春秋』52巻12号、1974年12月、298～322頁。

15 統計数字に関しては、前掲南洋群島教育会編『南洋群島教育史』533頁及び695頁を参照。

16 麻原三子雄「南洋群島に於ける国語教育」『国語文化講座第六巻 国語進出編』、（朝日新聞社、1942年1月、冬至書房復刻、1998年6月）101頁。

17 パラオ諸島に五つの公学校があったが、補習科を設立したのはコロール公学校のみであった。また、「木工徒弟養成所」はコロール公学校に附置されていたが、生徒はパラオ住民だけではなく、南洋群島各支庁管内から2～3名ずつ募集入学していた。外務省条約局法規課編『外地法制誌第五部 委任統治領南洋群島・後編』（1963年10月）15頁を参照。

18 前掲『南洋群島教育史』355～359頁及び696～697頁を参照。

19 創始以来支給した実績は2名ともヤップ島の住民だという。前掲『南洋群島教育史』426～429頁を参照。

20 当時各植民地から日本内地留学した学生は一般の学齢より年上の場合が多い。

21 前掲上前「三十年目の南洋群島」『文芸春秋』52巻12号313頁を参照。

22 谷崎潤一郎の中国旅行に関しては、西原大輔『谷崎潤一郎とオリエンタリズム - 大正日本の中国幻想 -』（中央公論新社、2003年7月）に詳しい論述がある。

23 谷崎潤一郎「上海見聞録」『文芸春秋』1926年5月号。「上海交遊記」『女性』1926年5-6月、8月号。両方とも『谷崎潤一郎全集』第10巻（中央公論社、1967年8月）に収録されている。

24 前掲谷崎「上海交遊記」『谷崎潤一郎全集』第10巻564頁。なお、引用文は原則として原文の旧字・旧仮名遣いを現行のものに改めて記した。

25 前掲谷崎「上海見聞録」『谷崎潤一郎全集』第10巻554頁。

26 ビル・アッシュクロフト、ガレス・グリフィス、ヘレン・ティフィン共著、木村茂雄訳『ポストコロニアルの文学』青土社、1998年12月。

27 芥川龍之介「上海遊記」『大阪毎日新聞』1921年8月17日～9月12日、18篇。なお、1922年1月1日から2月13日まで同新聞に「江南遊記」を

連載し、1925年11月改造社より『支那游記』を刊行した。

28 佐藤春夫「殖民地の旅」『中央公論』1932年9～10月。後に作品集『霧社』（昭森社、1936年7月）に収録された。

29 井伏鱒二「花の町」『東京日々新聞』『大阪毎日新聞』1942年、どちらも『井伏鱒二全集』第10巻（筑摩書房、1997年8月）に収録されている。

30 牛島春子の紹介と「祝という男」の転載歴に関しては、『牛島春子作品集』（日本植民地文学精選集〔満洲篇7〕、ゆまに書房、2001年9月）に詳しい。なお、本稿での引用は『〈外地〉の日本語文学選 満州／内蒙古・蒙古』（新宿書房、1996年2月）に再録されたものを参照。

31 前掲『牛島春子作品集』に収録されている「重たい鎖 - 『祝という男』のこと」や「感傷の満州」（いずれも初出未詳）、「祝のいた『満州・拝泉』（『〈外地〉の日本語文学選 月報2』、1998年2月）などの随筆を参照。

32 「満州国」の住民構成は非常に複雑であり、日本人の「日系」と満民族・漢民族の「満系」とモンゴル民族の「蒙系」との三大系に「白系露人」などである。

33 前掲牛島「祝のいた『満州・拝泉』」を参照。

34 丸山林平「満州国における日本語」や大石初太郎「関東州の日本語教育」（どちらも前掲『国語文化講座第六巻 国語進出編』に所収）、岡田英樹『文学に見る「満州国」の位相』（研文出版、2000年3月、167～184頁）を参照。

35 前注の丸山「満州国における日本語」を参照。歴代の特等・一合格者累計総数は462人で、合格率は平均8.8パーセントぐらいと厳しいものだった。ただし、合格者の中には「台湾籍」「朝鮮籍」なども含まれていたという。

36 前掲『ポストコロニアルの文学』146頁。

37 たとえば、松下博文「中島敦『マリヤン』考 - 越境する日の丸（その一） -」（『叙説』14号、1997年1月、55～59頁）や中村和恵『『マリヤン』に聞きたい』（『現代詩手帖』40巻2号、1997年2月、87～91頁）、橋本正志「中島敦『マリヤン』論 - 〈南洋島民〉の虚像と実像 -」（『論究日本文学』67号、1997年12月、44～53頁）などがあげられる。

38 詳しくは、前掲西原『谷崎潤一郎とオリエンタリズム』を参照。

39 拙稿「台湾の日本語文学における翻訳の装置」『第23回国際日本文学研究集会会議録』、2000年3月、154～167頁）や、前掲李「『日本語文学』とは何か - 台湾の場合を考える -」を参照のこと。

(yuhuilee@hotmail.com)